

昭和初期解剖学用語の改良と国語運動

澤井 直, 坂井 建雄

順天堂大学医学部解剖学・生体構造科学講座

受付：平成21年9月7日／受理：平成22年2月9日

要旨：日本語解剖学用語は昭和10年代に大きく変化した。国際解剖学用語の協定が変化したことがその大きな要因と考えられてきたが、その他に国語改良運動の影響がある。特に国語愛護同盟と国語協会の活動は簡明な日本語の用語、また学科間で統一された用語を求めた。解剖学会用語委員はこの求めに呼応し、従来のようにラテン語用語の直訳にこだわらずに、日本語として分かりやすい用語を定めた。制定の際には医学系の他学会とも協議して、医学用語の一部として他学科にも受け入れられやすい用語が採用されている。またこの時期に定められた用語が現在の用語の基となっている。

キーワード：日本語解剖学用語, 国語愛護同盟, 国語協会

1. はじめに

『解体新書』の翻訳によって西欧の解剖用語に対応する語が日本語語彙に導入されて以来、解剖学で使われる日本語用語は変化を重ねてきた¹⁾。用語が指す対象である人体の部分そのものは変化しないにもかかわらず、用語は、人為的に作られ使用者の選好に応じて取捨選択されるがために変化する。現在の用語を『解体新書』の語と比べると、共通点も多いが、用語そのものや漢字や漢字の字体などの違いも目に付く。

現在の人体構造を言い表すための日本語用語は昭和初期に解剖学会が制定した用語に直接の起源を持つ。この時期に整理された用語が現在でも使われている。

では、解剖学用語制定の際にどのような考えに基づいて旧来の用語からの変更が行われたのだろうか。

従来は国際解剖学用語への対応のために日本語用語に変化がもたらされたと言われてきた²⁾。また当時の漢字の字体整理の流れに応じて使用文字が変化したことも指摘されている³⁾。いずれも解剖学会の外部で起こった変化に対応するために日

本語用語を改変したと考えている。本論文では、字体整理を含め、国語そのものの改善を目指す国語運動が解剖学用語の変化に大きく関与し、しかも一見すると解剖学とは無関係に思われる国語改良運動に呼応して解剖学者が積極的に用語改良を行ったことを明らかにする。また国語改良運動によって医学界で使われる用語全体の統一が試みられ、解剖学用語は解剖学者だけが用いるのではなく、医学関係者全体が使用する用語であることを考慮するようになったことも、解剖学用語の変化に影響を与えている。

以下では、明治以降の解剖用語の状況を簡略に示した後に、昭和初期の解剖用語の変化を追うが、特に解剖学会によって初めて制定された用語集である昭和5年(1937年)『改訂解剖学名彙第17版』と昭和19年(1944年)の『解剖学用語』の間にある変化に注目する。

2. 解剖用語統一の要望

『解体新書』の訳業によって、オランダ語原書において名を与えられて弁別されていた構造に対応する語彙を日本語は備えるようになった。『解体新書』の原本はクルムスのドイツ語の著作のオ

ランダ語訳であり、オランダ人解剖学者の知見をオランダ語固有の語彙で表したのではない。クルムスの用いた用語自体はラテン語や西欧各国語の解剖学書における名称を基礎にしており、そのオランダ語訳における用語や造語法も当時の西欧語の解剖学書のものと同通していることが多いため、オランダ語からの翻訳によって用いられるようになった日本語用語はクルムスに限らない解剖学書用語あるいはオランダ語以外の西欧諸語の用語と対応づけることも可能であった。

そのため、英語の解剖学書が取り入れられ、その翻訳が行われた明治初期においても、多くの用語は『解体新書』や『医範提綱』、『重訂解体新書』などのオランダ語からの翻訳に用いられたものを利用できた⁴⁾。後のドイツ語解剖学書の導入の場合でも同じである。またこれらの言語の解剖学書にはラテン語用語も現れるが、それについても同じように既存の用語を用いることができた。

明治初期においては『解剖訓蒙』で使用される用語が広く用いられたようである。明治初期以来多くの日本語解剖学書が出版され⁵⁾、各著者は既存の『解体新書』や『解剖訓蒙』の用語を踏襲・借用したが、借用する用語の取捨選択は著者ごとに異なり、新語の挿入も適宜行われていた。その結果明治中期には一つの部分に対して異なる日本語用語が複数存在することとなった⁶⁾。

明治26年(1893年)に開かれた第1回解剖学会においては解剖用語の統一が学会の課題としてあげられ、解剖学者間で用語の不統一が問題になっていたことが分かる⁷⁾。その後明治44年(1911年)に石川喜直が第19回解剖学会において学術語協定を希望する意見を出しているが⁸⁾、反響を呼ぶことはなく、明治期において解剖用語は不統一のままであった。その他森田齊次も用語の不統一を嘆く発言を行っている⁹⁾。

解剖用語の混乱は日本語に限ったことではなく、西欧語においても起こっていた¹⁰⁾。明治28年(1895年)にドイツの解剖学会が主体となって『BNA』(Basle nomina anatomica)として知られるラテン語解剖学用語についての協定をバーゼルにて制定し発表した¹¹⁾。このBNAは欧米諸国に広

まり、解剖学用語の標準となっていく。

BNAやそれ以前の通常のラテン語解剖用語は当該の部分の素材や特徴的な形態を示す名詞とそれを修飾する形容辞の二つの要素からできている。体を支持する硬い構造である「os」や赤い液体を収める管である「arteria」などの構造の種類を表す名詞が最初におかれ、その後名詞を修飾する形容辞が置かれ、「os」あるいは「arteria」という構造を持つもの同士が区別される。形容辞は名詞の属格や形容詞を用いる。「femur」という部位の構造であることを示す場合は、「femur」の属格の「femoris」あるいは名詞から派生した形容詞「femoralis」を用いる。これにより「os femoris」や「arteria femoralis」という用語が作られる。形容辞は複数の語からなることもある。オランダ語や英語、ドイツ語などの場合は名詞と形容辞の順番は変化する。

『解体新書』以来、「os」に対しては「骨」、 「arteria」に対しては「動脈」が割り当てられ、「os」から始まるラテン語用語は「～骨」、 「arteria」で始まる用語は「～動脈」と訳された。「femur」には「大腿」や「股」が割り当てられた。ラテン語用語において用いられる名詞と形容辞は同じものが何度も用いられるため、日本語に訳す際にも同じ語を繰り返し用いることで多くの用語を訳すことができた。『解体新書』以来の解剖学書において新たな用語が使われるようになり、その過程において西欧語の名詞と形容辞に対する多様な訳が解剖用語の語彙として蓄積されていった。

鈴木文太郎は『解体新書』以来蓄積された語彙を参照しながらBNAを日本語に翻訳し、BNAのラテン語用語と日本語用語を併記して明治38年(1905年)に『解剖学名彙』として出版した¹²⁾。

BNAでは多くの用語が羅列されるだけで、各用語の示す対象についての説明はなく、体表の部分の用語のみ図示されている。『解剖学名彙』も同様に用語の羅列によって構成されている。そのため、人体の構造を指示・説明するために解剖用語を使用する一般の解剖学書とは異なり、BNAと『解剖学名彙』だけから人体の構造を思い描くことは難しい。しかし、用語は字下げを用いるこ

とで構造化された状態で配列されている。たとえば『解剖学名彙』の「骨学」の章には脊柱・胸郭・頭蓋骨・顔面骨・上肢骨・下肢骨が大見出しとしてあげられ、それらを構成する尺骨や橈骨などの個骨が字下げをして小見出しで示され、さらに個骨にある突起や凹みなどが個骨ごとに羅列されている。このようにして骨の中には上肢骨と分類される骨群があり、さらに上肢骨には尺骨や橈骨などの骨が含まれること、また尺骨には肘頭や鉤状突起などの部分があることが分かり、用語の配列はある程度は実際の人体を模したものとなっている。このように構造化された用語の配置は以降の用語協定にも引き継がれ、解剖学用語集の特徴となっている¹³⁾。

『解剖学名彙』は事実上の日本語解剖用語の標準となり版を重ねるが、執筆・改訂は鈴木文太郎個人が中心であり、解剖学会は公式には関与していなかった。そのため、『解剖学名彙』以降も解剖学者はそれぞれの好みで解剖用語を使用し、用語の混乱は収拾されなかった。鈴木文太郎自身が『解剖学名彙』の用語を使用している解剖学者として二村領次郎や森田齊次を挙げているが¹⁴⁾、彼らの著作においても部分的には異なる用語が用いられており、解剖学者間で均質な用語というものはなかった。

3. 解剖学会による解剖学用語制定

昭和4年(1929年)に解剖学会が主体となって積年の事案であった解剖用語の統一に向けて動き始める。用語制定の提案を行った4名(岡嶋敬治, 西成甫, 進藤篤一, 平光敬吾)が委員となり、既にある鈴木文太郎の『解剖学名彙』を基に作業をすすめることが方針として採られた。翌5年(1930年)の解剖学会の議事録では、ドイツでの新たな用語協定の動きを待つという方針を採ったと記されているが、ドイツ側の動きが難航したために、結局はこの時点での案が採用される。選定された用語は『改訂解剖学名彙第17版』に収録された¹⁵⁾。用語のみを提示するという点や日本語ーラテン語対照という点、また日本語用語そのものも以前の版と大きな変化はないが、学会主導

による用語制定としては、医学系学会の中では眼科学会に次ぐ¹⁶⁾、最初期のものとなった。

昭和15年(1940年)の第48回日本解剖学会総会では、解剖学用語の改訂が用語委員に委嘱され、後で述べる日本医学会の医学用語整理委員会と協議を行いながら用語案が選定され、18年に新たな解剖学用語が制定された。この用語は翌昭和19年(1944年)に『解剖学用語』としてプリント形式で配布された¹⁷⁾。今回も日本語とラテン語の併記、用語のみの提示、構造化された用語の配列という点は『改訂解剖学名彙第17版』と変わらない。

4. 国際解剖学用語協定の变化とラテン語用語の変化

『改訂解剖学名彙第17版』と『解剖学用語』の用語の相違の要因として従来挙げられてきたのは、参照とするラテン語用語の変化である。

BNAは用語協定の嚆矢であり、ドイツ以外にも普及した。しかし国際解剖学会では正式な用語協定とは認められず、別の用語協定を以て正式な国際解剖学用語とするという決議がされていた。昭和10年(1935年)にドイツ解剖学会は数年にわたる協議の上、イェナで解剖学用語の新協定『JNA』(Jenaer nomina anatomica)¹⁸⁾を制定する¹⁹⁾。JNAは日本と関係の深いドイツ解剖学会による協定であり、また日本も参加している国際解剖学会でも認められる公算が高かったため、日本の解剖学書は受容していく。昭和15年に解剖学会の用語委員が解剖学用語の改訂に取り組む際も、JNAへの対応が重視される。

実際にはJNAは昭和10年(1935年)の制定以降も検討を繰り返し、日本解剖学会から変更案も提出され、修正を繰り返す²⁰⁾。そのため各国の解剖学会はJNAの採用を躊躇し、BNAほど国際的に受け入れられなかったが、日本解剖学会ではラテン語についてはJNAに準拠した。

JNAの用語をBNAの用語と比べると大きく異なっている。関節を表す語はBNAでは「articulatio」であるが、JNAでは「articulus」が多用されるなど、基本的な語彙の変化が多く見られる。また

BNAは直立するヒトを基準にした方向用語を用いるのに対し、JNAは四足歩行の動物にもあてはまる基準にした方向用語を用いる。従ってBNAにおいて「superior-inferior」(上方と下方)という形容詞で方向を示された用語は、頭部においては「maxillaris-mandibularis」(上顎側と下顎側)、体幹では「cranialis-caudalis」(頭側と尾側)、四肢では「proximalis-distalis」(近位と遠位)に変化し、どのような姿勢の場合にも利用できる用語になった。

その他には静脈の名称は位置や分布域を表す形容辞を用いるようになった。胸部の縦隔深部右側において複数の肋間からの枝を集める静脈である「v. azygos」は、左側にも同様の位置に静脈があるが、肋間からの枝の数が違う。そのため通常の左右対称の静脈とは異なるために、ラテン語で対称あるいは奇性を意味する「azygos」の名で呼ばれていた。BNAもそれを踏襲したのであるが、JNAでは形状に基づくこのような静脈名を排除して、静脈の位置から「v. thoracica longitudinalis dextra」(右縦隔静脈)と名付けた。これによりその位置がどこにあるかが名称から明らかとなった。

このようにBNAとJNAは異なる考えに基づいて名称を選定しており、多くの語が変化した。このこともあって、JNAの採用が進まなかった。日本の解剖学者はドイツ解剖学会が制定したことから、JNAについては好意的に受け止めたが、それを受容する際にBNAとの相違について対応を迫られ、両者を比較する研究を多数出版する²¹⁾。

しかしながら『改訂解剖学名彙第17版』と『解剖学用語』の用語の間の相違点はBNAとJNAの相違だけでは説明できない。たとえばJNAは「superior-inferior」を用いなくなったのであるが、『解剖学用語』は代替として用いられるようになったラテン語の「maxillaris-mandibularis」、「cranialis-caudalis」、「proximalis-distalis」を総じて「上一下」としており、日本語の用語上はBNAからJNAへの最大の変化とされている方向用語の変化は見られない。

その他にも、脊椎を構成する骨の中で名前があるものについては、『改訂解剖学名彙第17版』では「第一頸椎(載域) atlas」「第二頸椎(樞軸)

epistropheus」「尖椎 vertebra prominens」「薦骨 os sacrum」であるが、『解剖学用語』では「環椎(第一頸椎) atlas」「軸椎(第二頸椎) epistropheus」「隆椎 vertebra prominens」「仙骨 os sacrum」となっている。

用語の数を比較すれば、『改訂解剖学名彙第17版』には5543語が収録され、『解剖学用語』には5662語が収録されている²²⁾。このうち、BNAとJNAの間のラテン語用語の異同と『改訂解剖学名彙第17版』と『解剖学用語』の日本語用語の異同に関して、1) ラテン語用語無変化+日本語用語無変化=1751語、2) ラテン語用語無変化+日本語用語変化=1113語、3) ラテン語用語変化+日本語用語無変化=676語、4) ラテン語用語変化+日本語用語変化=1503語、5) JNAと『解剖学用語』新規採用の用語=500語、6) JNAと『解剖学用語』不採用のBNA用語=619語である。

もし『改訂解剖学名彙第17版』と『解剖学用語』との間の相違がBNAとJNAの間の相違だけに基づくのであれば、1)、4)、5)、6)の場合だけが見られるはずであるが、実際には上記の方向用語のような2)の場合や椎骨の名の3)の場合も多数あるのである。

従って、『改訂解剖学名彙第17版』から『解剖学用語』への日本語解剖学用語の変化を説明するには、日本語の解剖学用語が制定される過程やその用語が使用される状況に関して生じた変化を考慮する必要がある。

5. 国語運動と解剖学用語、医学用語

解剖学会が発行する『解剖学雑誌』には、用語に関して行われた協議についての記録が残っている。昭和初頭の記録は『改訂解剖学名彙第17版』の作成に関わるものやその後は組織学用語・発生学用語の制定に関するものが中心である。

ところが、昭和11年(1936年)に行われた解剖学会集会の協議会記録には、国語愛護同盟という団体から学術語統一について「術語ノ未ダ制定無キモノハ早ク決メテ頂キタイ」という希望申し入れがあったことが記載される²³⁾。また翌昭和12年(1937年)の協議会記録には国語愛護同盟の

入沢達吉, 志賀潔, 下瀬謙太郎三氏の名で解剖学会の進藤篤一会頭宛に用語選定の現状に関する照会の書面があり, 会頭と幹事が回答したことが記載されている²⁴⁾。

解剖学会の協議議事録は, その性質上解剖学会が主体的に行うことが中心に記載され, 解剖学用語についても解剖学会が用語のための委員会を組織したことや用語委員会からの活動報告が中心であり, 外部の団体からの問い合わせの情報の記載は異例である。この国語愛護同盟の活動が, 日本語解剖学用語の変化に大きく関わりを持っているのである。

国語愛護同盟は, 漢語や外国語が乱用されている状況において「よい国語をもちたてる」ことを目的として昭和7年(1932年)に作られた団体であり, 国語や日本語を専門としない参加者が多かった。既存の日本語の保全を目指すのではなく, 積極的な改良を目指し, カナモジカイやローマ字主義者, エスペランティストも参加している。具体的な目的として, 口語体の使用, 難漢字の撤廃, 発音式の仮名遣いの使用, 左横書きの使用, 表音文字の研究を掲げ, 研究に留まらず運動によって現実の社会で実行可能な改良・進歩を目指していた。さらに日本語全般についての改良だけでなく, 各専門分野における言葉の問題を解決するために法律・医学・経済学・教育学の4つの部門を設置していた²⁵⁾。

国語愛護同盟医学部会の会合は志賀潔や下瀬謙太郎が中心となって昭和8年(1933年)から始まり, 特に医学用語の整理と統一のために活動を行っていた。下瀬は第1回の会合において医学部会の使命について「医学用語が, 医学者に難解であったり, 誤解の種となったり, 又は, まちまちになっていては, 学術用語の資格がないのでありますから, 不良の用語については, 改造なり, 整理なり, 統一なりの手段をとらなければなりません。」と語り²⁶⁾, 医学用語の改良に関わっていく姿勢を示した。その活動方針を示した「医学用語を選ぶ方針」には, 用語統一に向けての方針と用語整理に関する方針が含まれる。統一に向けては, 医学に関係する全科の用語の統一のために医学各科でと

りまとめられた用語を尊重することが謳われ, 用語の整理については, 漢語ではなく耳で聞いて分かりやすい訓読みの語, 複雑な漢字ではなく簡易な漢字, 一つの物事には一つの名称, 略称の整理, 外来語は漢字で表記しない, 等の方針が含まれる²⁷⁾。

国語愛護同盟は昭和12年(1937年)に国語協会と運営が困難に陥っていた言語問題懇話会と合同改組して国語協会となる²⁸⁾。国語協会は文部省の臨時国語調査会の後援・促進及び国語の整理統一を目的として発足した協会で, 会長は近衛文麿, 副会長は臨時国語調査会会長の南弘であった。新しい国語協会では, 会長を近衛文麿首相とし, 国語協会の理事の約半分が文部省の国語審議会のメンバーとなるなど, 政府の国語整理事業との関連が深くなっている。新国語協会では引き続き国語愛護同盟の4部会が存続し, さらに婦人部が創設される。この新国語協会における医学部第一回例会の記録が国語協会の機関紙『国語運動』に残されている。会の冒頭において西成甫は「国語協会と国語愛護同盟の合同が円満に成立したのは同慶である。わが医学部会は従来如く活動する予定である」²⁹⁾と述べ, 医学部会は国語愛護同盟時代と同様の問題に取り組むことを宣言している。国語愛護同盟の初期に掲げた活動方針は改組によっても変化は受けなかったようである。

この国語愛護同盟および後の国語協会と解剖学会の解剖学用語との関わりは, 解剖学会側の記録からは昭和11年(1936年)と12年(1937年)の申し入れと要望しか見られないが, 国語愛護同盟の機関紙『国語の愛護』と国語協会の機関誌『国語運動』には解剖学会との強いつながりが見えてくる。

まず人的な面では, 国語愛護同盟医学部会の記録には解剖学会に所属する西成甫の名が参加者として何度も現れる。西は国語協会の医学部会となってからは幹事として積極的な発言を行っている。また解剖学会の望月周三郎, 鈴木重武, 藤田恒太郎, 小川鼎三の名も国語協会医学部会の出席者として記載されている。

さらに解剖学会を含む医学系の学会から構成され, 4年に1度総会を行っていた日本医学会と

新・国語協会との関係からも解剖学会との関連を見ることができる。

国語愛護同盟医学部会の「医学用語を選ぶ方針」に含まれる用語統一と用語整理の方針のために行った活動は、一から用語を選定するものではなく、人を組織させて動かすというものであった。実際の用語整理については各学会に任せ、まず各学会に用語整理・統一を行うように促し、その後各学会間での用語の統一を行おうとしていた。そして学会間での用語の統一を図るために国内の医学系の学会が合同で開く日本医学会へ働きかけていく³⁰⁾。

国語愛護同盟医学部会の西成甫らは昭和9年(1934年)の第9回日本医学会会頭の入沢達吉や準備委員長の宮川米次に医学用語統一について相談するが、共感を得ることはできたが日本医学会での具体的な動きには結びつかなかった。この結果を受けて国語愛護同盟医学部会は日本医学会に参加する各分科会に対して用語の統一について直接呼びかけを行うという考えを示している。昭和11年(1936年)と12年(1937年)の解剖学会の協議会記録に残されているのは、この働きかけ、およびそれに対する解剖学会の反応なのである。

日本医学会が実際に用語の整理に取り組んだ際にも国語協会が大きく関わっている。国語協会医学部会の第一回例会において、日本医学会内の各分科会内での用語統一の動きが進み、次の段階として各分科会制定の用語相互の食い違いをなくして統一させようという、「横の連絡」についての問題に取り組み始めた。昭和13年(1938年)の第10回日本医学会を前に国語協会医学部会は、日本医学会内に用語問題を中心とする一分科会の新設、もしくは継続事業として調査部の設置を、国語協会医学部会に参加していた入沢達吉を通して森島庫太会頭に申し入れる。その結果、「日本医学会は継続事項として医学用語調査委員会を設け、各学会協力の下に医学用語を調査し、その整理を行ふ」という決議が行われ、第11回の日本医学会の幹部に引き継がれる。昭和15年(1940年)に第11回日本医学会の長与又郎会頭が医学用語整理委員に用語事業を囑託することにし、日

本医学会各分科会から委員が選出され、協議を重ねる³¹⁾。その結果昭和17年(1942年)の第11回の日本医学会において、特に重要な医学用語が「第一次医学用語」として選定され、『医学用語集第一次選定』として昭和18年(1943年)に公表される。国語愛護同盟時代からの医学用語統一の願いが現実のものとなったのである。

医学用語整理委員会の委員については、委員長の木下正中を始め、多くの委員の名が国語協会医学部の記録に現れる。国語協会医学部会が日本医学会への働きかけを協議した記録には、木下正中の「日本医学会でやって、我々がそれを担当すればよい」という発言が残っているが³²⁾、その言葉通り木下をはじめとする国語協会医学部会の参加者が医学用語整理委員会に名を連ね、事業に乗り出しのである。木下は国語協会の機関紙『国語運動』に「日本医学会の医学用語整理について」という論文を発表しており、日本医学会の事業として用語整理が行われるようになった後においても、国語協会医学部会と医学用語整理事業とは深い関係を持っていたことが明らかである。

解剖学会用語委員会の『解剖学用語』の選定の時期は日本医学会の医学用語整理委員会の『医学用語集第一次選定』の選定期と重なり、両方の用語集の解剖学関連の用語は共通している。『医学用語集第一次選定』は三部からなり、第1部は解剖学・組織学・発生学の用語、第2部は微生物・寄生虫の用語、第3部は臨床・基礎の多くの学科で用いられる第1部と第2部以外の一般的な用語が盛り込まれている。このうちの第1部の用語が解剖学会と関連するが、他学会の関連する用語と比べると圧倒的に多い³³⁾。

昭和16年(1941年)末に解剖学用語委員会が新たな解剖学用語の暫定案を作り、解剖学専攻の学者に提示して意見を求め、さらに日本医学会の用語委員会との協議を重ねたうえで『解剖学用語』が制定されている。「他学科殊に臨床方面と関係あるものについては再三協議を重ねてその統一をはかった」³⁴⁾とあるように、解剖学会側の案がそのまま医学用語集に採用されるのではなく、協議によって変更も行われていたようである。も

もちろん日本医学会側の『医学用語集第一次選定』は人体構造の用語を網羅することを目的としていないために、『解剖学用語』と比べて用語は少なくなっている³⁵⁾。

そのほか、国語協会医学部に参加していた廣瀬渉は解剖学用語で用いられる漢字について調査し、その結果を『解剖学雑誌』に「解剖学用語の調べ」として発表している³⁶⁾。この調査は一見すると解剖学会による解剖学用語の選定・改訂のために行われたように見えるが、廣瀬は同様の調査を他の医学関連の用語についても行っており、「解剖学用語の調べ」と合わせて『第十一回日本医学会 医学用語整理委員会報告 第五 医学用文字の調査』として発表している³⁷⁾。このことから解剖学用語選定が解剖学会の事業に留まらず、医学用語選定の一部として他学会の用語選定とも関連づけられていたことが明らかである。

以上のように、昭和10年代後半の解剖学用語の改訂は解剖学会が他からの影響を受けることなく独自に行ったのではない。国語愛護同盟や国語協会による国語改良運動や、この運動を契機として起こった医学用語の整理事業に影響を受け、また影響を与えながら、使いやすい日本語解剖学用語、すなわち解剖学者だけが用いる用語ではなく、医学関係者全体が使用する用語へと変化していった。つまり医学用語の中の解剖学用語として、他科の用語との関連を考慮すべきものになっていったのである。

6. 解剖学用語制定における 解剖学会用語委員の働き

ここで解剖学会において解剖学用語の整理に関わった人物を取り上げるが、特に西成甫の活動に注目する。

『改訂解剖学名彙第17版』を制定する際の用語委員は平光吾一、西成甫、岡嶋敬治、進藤篤一、『解剖学用語』に関わった用語委員は西成甫、進藤篤一、尾持昌次、小川鼎三、望月周三郎。日本医学会の医学用語整理委員会に関係したのは西成甫、望月周三郎と藤田恒太郎であった。このうちのほとんどは国語協会医学部会の記録に名前が

残っている。

この3つの委員のすべてに名を連ねる西成甫は、解剖学会の解剖学用語制定において活発に働いていた人物である。

比較解剖学の大家として日本の解剖学に多大な影響を与えた西は言葉についても強い関心を抱いていた。エスペランティストとしても知られ、日本語文献のエスペラント語訳を行い、いくつかの重要な解剖学論文をエスペラント語で書いている³⁸⁾。

『改訂解剖学名彙第17版』の制定の委員となったころから解剖学用語に関する活動が増え、その後は二村領次郎の解剖学用語集の改訂を行って用語の普及に努めている³⁹⁾。組織学・発生学用語についても、その制定を解剖学会に求めている。

昭和11年(1936年)の『小解剖学』においてJNAをいち早く取り入れたのも西である⁴⁰⁾。昭和12年(1937年)の解剖学会の協議会記録には「日本解剖学術語改正に関する件 西成甫」とあり、単独で解剖学用語改正の提案を行ったようであるが、その内容については記録が残っていない。続けて「国際協定解剖学用語が決定して後の事で宜しと考ふる故を以て西教授はこの提案を撤回された」とあり、国際解剖学会でのJNAの承認時期との兼ね合いで自ら撤回したようである⁴¹⁾。

また国語愛護同盟の活動や国語協会の活動にも西は参加している。西自身が国語の問題に関心を持った時期は不明である。藤田恒太郎は「横隔膜」について「膈→隔の案は既に昭和5年解剖学用語制定の際に西教授から提唱せられたが、用語委員の1人であった故岡嶋教授は頑として聴かれなかったということである」と残している⁴²⁾。このことから国語愛護同盟に参加する以前から用語の漢字の変更に関心を持っていたと考えられる。国語愛護同盟医学部会には第2回の会合から参加し、改組後の国語協会においては医学部会の世話人を務めている。日本医学会の医学用語関連の事業についても、国語愛護同盟から用語統一の働きかけを行う際の中心人物であり、日本医学会が医学用語整理委員会を設置した後は解剖学会を代表して委員会に参加している。

このように国語改良運動の団体に深く関わって

いることから、西はその活動方針に賛同していたと考えても問題ないであろう。またこの運動に関わりながら、医学用語整理委員の仕事や解剖学会の用語委員を務めていたことから、西は解剖学用語の制定にあたり、国語愛護同盟や国語協会の方針を具現化するように働いていたと考えられる。

解剖学用語制定に関係する活動について西自身の明確な記述は残されていないが、藤田恒太郎は、『解剖学用語』で導入された用語について旧来の用語から変更された経緯や由来について説明するなかで、「隔」の字の提案や次節で取り上げる「胸鎖乳突筋」の導入、「gingiva」に対して「歯肉」を当てたことなど⁴³⁾、複数の語について西の提案であったことを明言している。西以外にこれほどまでに藤田が用語の提唱者として名前を挙げている解剖学者は存在せず、日本語として分かりやすい解剖学用語にするために西が率先して積極的に改革を行っていたことが分かる。

しかし、解剖学用語の変化のすべてを西に帰することもできない。藤田恒太郎によれば西以外の委員も積極的に新しい用語案を提出していた⁴⁴⁾。「仙骨」と「脳弓」はそれぞれ小川鼎三、藤田によって提案され、採用されている。国語愛護同盟へと遡ることができる用語改革の方針は解剖学会用語委員会にも浸透していたことが窺われるのである。

7. 解剖学用語の変化

前節まででは国語愛護同盟・国語協会の構成員と解剖学会の用語委員との関係、および両者の活動の関係について見た。では、これらの国語改良運動に関わる団体の活動が、『改訂解剖学名彙第17版』から『解剖学用語』への日本語用語そのものの変化と関連があるのだろうか。

関連はある。むしろ『解剖学用語』における用語の選定の基準は国語愛護同盟が掲げた医学用語選定の方針と一致している。国語愛護同盟が掲げた方針は、日本語としての分かりやすさに重点を置き、耳で聞いて分かる語や難しい漢字を用いない語を推奨していた。『解剖学用語』の用語をいち早く取り入れた高木耕三・尾持昌次は『解剖学

用語』の日本語名称の選定の基準として、中等教育を受けた程度の誰もが読めて意味が分かる字、同音異義語を避け、字画の少ない漢字を優先するという方針が採られたと書いており⁴⁵⁾、解剖学用語の選定の方針は国語愛護同盟の選定の方針は一致していることが分かる。

いくつか実例から、国語愛護同盟と国語協会の活動と解剖学用語の変化について考える⁴⁶⁾。

1. 「第一頸椎(載域)」→「環椎(第一頸椎)」
ラテン語用語はともに「atlas」。『改訂解剖学名彙第17版』の「載域」はギリシア神話の天を支える巨人アトラスに因むが、『解剖学用語』では「環椎」とされ、椎骨であること、形状が輪状であることが分かる名前となっている。
2. 「樞軸」→「軸椎」
「環椎」と同様に、椎骨であることが分かるようになった。
3. 「薦骨」→「仙骨」
前者は「os sacrum」のsacrumを「生け贄」と解釈し、供え物の意を持つ「薦」を用いていたが、意味が明瞭ではないので同音の「仙」へと変えたものである⁴⁷⁾。
4. 「臑骨」→「寛骨」
「臑」の本字で「こしぼね」を表す「臑」を分解し、常用字にある「寛」へと変えた⁴⁸⁾。
5. 「楔状骨」→「蝶形骨」
これはラテン語の字義に即した「楔状」という言葉から骨の形を表す「蝶形」への変化であるが、足にも「楔状骨」があるために変更されている。「蝶骨」という案もあったようであるが、今度は「腸骨」と同音となるために避けられた⁴⁹⁾。
6. 「胸鎖乳様筋」→「胸鎖乳突筋」
胸骨と鎖骨から起始し、乳様突起に停止する筋である。ラテン語では「m. sternocleidomastoideus」で、語義通りに訳せば「胸骨と鎖骨から乳様のものへの筋」となり、『改訂解剖学名彙第17版』では「胸鎖乳様筋」とされた。ラテン語の「-mastoideus」(乳様のもの)が指すのは「乳様突起」だと解釈し、さらに乳様突起を「乳突」に略すことで、停止部を明瞭に示した。他には

「茎状突起」から起こる筋肉が「茎状~筋」から「茎突~筋」になった。

7. 「甲状頸幹」→「甲状頸動脈」

BNA と JNA の両方において数本の枝が分岐する根本となっている短い動脈に対して、幹を意味する「truncus」という名詞が使われる。BNA と JNA の両方に「truncus thyrocervicalis」が現れるが、『改訂解剖学名彙第 17 版』は「甲状頸幹」、『解剖学用語』では「甲状頸動脈」が当てられている。前者は「truncus」を語義に即して「幹」と訳しているが、後者は語義に即した「幹」では、それがどのような素材・種類であるのか分からないために、直訳を捨てる。「甲状頸動脈」という名前からは、容易にそれが動脈の一部であることが分かる。

8. 「奇静脈」→「右縦隔静脈」

第 4 節で見たように、BNA と JNA ではラテン語用語が異なっている。日本語用語はラテン語用語の変化に応じて変えられた。

9. 「頭静脈」→「橈側皮静脈」, 「貴要静脈」→「尺側皮静脈」

BNA と JNA では上腕にある 2 本の皮静脈を、伝統的な名称にしたがって「v. cephalica」「v. basilica」としていた。『改訂解剖学名彙第 17 版』はこの語を語義通りに訳し、「頭静脈」「貴要静脈」としていた。JNA は「v. azygos」を廃して位置を明確に表す「v. thoracica longitudinalis dextra」していたが、この方針は上腕の皮静脈には徹底されていなかった。解剖学会の用語委員はこれを不服とし、ラテン語の語義とはまったく異なる「橈側皮静脈」「尺側皮静脈」という名前を与えた。これにより二つの静脈の位置が名称から分かるようになった。

10. 「視丘」→「視牀」

「視丘」には「シキユウ」という読みが与えられていたが、ほかにも「子宮」などの用語が同音であるために、変更されている。

11. 「眼窠」→「眼窩」

「窠」の字そのものを解剖学用語から除いたために別の漢字を当てはめている。読みは変わらない。眼科学会が定めた用語では「眼窩」を推

奨しており、その影響も窺われる。

12. 「繊維」→「線維」, 「顚」→「頰」など

書きやすい漢字への変更例。他にも「髀」→「顚」, 「阜」→「丘」, 「唇」→「唇」が変更された。「臓」の文字も難しいために変更が検討されたようであるが、そのまま使われ続けた。

13. 「穹窿」→「脳弓(弓隆)」

BNA, JNA ではともに丸天井を意味する fonix であり、日本語でも同じく丸天井を意味する「穹窿」が使われていたが、これから穴冠が外され、簡単な漢字になっている。

14. 「淋巴管」→「リンパ管」

ラテン語の「lympa」には明治以降、音を漢字音で模写した「淋巴」などが用いられてきたが⁵⁰⁾、『解剖学用語』ではラテン語用語の音を模写する場合にはカタカナを用いるようになった。この音転写の方針は、国語愛護同盟医学部会における下瀬謙太郎の発言に見いだされる⁵¹⁾。同様に「土耳其鞍」は「トルコ鞍」に変化している。

以上の例からも、『解剖学用語』は用字・音あるいは語そのものが分かりやすいものへ変化しており、その変化は国語愛護同盟が掲げた用語整理に関する方針と一致していることは明らかである。

つまり、1, 2, 6, 7, 8, 9 は用語そのものの分かりやすさが優先されている。5 と 10 では聞いたときの理解のしやすさが考慮されている。国語愛護同盟や国語協会の議論には、「ラジオ時代にふさわしい日本語」という表現が頻繁に出てくる。これは音だけで意味が明瞭な言葉を推奨するものであり、同音異義語を避けるよう求めているのであるが、解剖学用語にもその姿勢が見られる。また『解剖学用語』全体の傾向として、読み仮名の付された語が多くなっている。3, 4, 11, 12, 13 は難漢字を避けている。14 は外国語音を取り入れる際に用いる字種について、国語愛護同盟医学部会における方針に則っている。

『改訂解剖学名彙第 17 版』から『解剖学用語』の変化を考える際には、BNA から JNA へのラテン語の変化も考慮する必要がある。第 4 節末尾の

用語変化の分類に従えば、上記の例では8以外は2)のラテン語用語無変化+日本語用語変化の場合を取り上げている。もちろん、他の場合もある。たとえば上記の8や「硬口蓋 palatum durum」から「骨口蓋 palatum osseum」のようにラテン語の変化に応じて日本語用語も変化する4)のような場合もある。第4節で挙げた「cranialis-caudalis」などの方向用語の変化は3)に相当し、ラテン語の変化を無視している。1)に相当するものはもっとも割合が大きい。また日本語が変化する場合にも、全く新しい用語が作られる場合もあれば、上記の3や4のように旧名と同じ音になるようにして連続性を持たせようとする場合もある。

以上の比較から逆に『改訂解剖学名彙第17版』あるいは、その基にあった鈴木文太郎の『解剖学名彙』の用語の特徴が浮かび上がってくる。これらの中ではラテン語と日本語との対応が重視され、一度ラテン語と対応づけられた日本語の訳語は一貫して同じように用いられる。この点は国語愛護同盟においても安井洋が指摘している⁵²⁾。例えば、最初に「truncus」を「幹」と訳し、その後は「truncus」で始まる用語はすべて「～幹」となるのである。このような用語採用の方針は「truncus」だけでは何を指しているのか分からないという問題を含む一方で、日本語からラテン語の用語を想起・再構築しやすいという利点もある。

他方、『解剖学用語』において日本語用語に起こった変化は、日本語からラテン語の用語を想起しにくくしている。そのため、極端な捉え方をすれば、ラテン語用語の直訳を玉条とはしておらず、日本語用語が主で、ラテン語用語は同じ構造を表す日本語用語と併記されることによって対応づけられているにすぎない、と捉えることもできる。

しかし実際には日本語の解剖学・医学文献においては日本語用語だけではなく、ラテン語用語も使われることが多かった。学習者は両方の語を覚える必要があり、日本語用語とラテン語用語の間に一定の連関が有ることが望ましかった。

解剖学用語制定にあたってはこのような学習者の事情も考慮されている。日本語用語としての分かりやすさ・使いやすさと国際的に通用するラテ

ン語用語との対応付けという2つの相反する課題を追求する中で生まれた結果が『解剖学用語』なのである。

8. むすび

解剖用語は昭和初期に大きく変化し、特に昭和19年(1934年)の『解剖学用語』において従来の用語の多くを捨て、新しい用語が生まれた。その誕生の背景には、1)解剖学者間での用語の統一を図る、2)国際解剖学用語と対応させる、3)医学用語の一部として、他学科との協調を図る、4)用語そのものや使用する漢字を分かりやすくする、という意図が働いていることを前節までで明らかにした。これらは解剖学用語を変化させた要因であり、言い換えれば解剖学用語が満たすべき性質を要請している。

このうち1)については明治以来解剖学者が意識していた。また鈴木文太郎の『解剖学名彙』は2)に基づいている。『改訂解剖学名彙第17版』は鈴木文太郎の訳業に依りながら、解剖学会主導で用語を制定することにより1)と2)が実現されたのである。

一方、『解剖学用語』の成立においては、1)がその基底にあるのはもちろんであるが、2)については多少の揺れがある。日本解剖学会はJNAの問題点を指摘し、改良案を提示し、ドイツの解剖学者からも賛同を得ている⁵³⁾。『解剖学名彙』のように国際解剖学用語が単純に外から与えられるのではなく、国際解剖学会に参加する学会として国際解剖学用語の決定にも関与するようになっている。この点で、2)の意図が持つ意味はBNAの頃とは多少異なっている。しかし、最終的にはJNAのラテン語用語に準拠するように決定している。

また、従来はJNAの劇的な変化への対応が『解剖学用語』の変化を生んだと評価されることもあったが、実際にはJNAに関する解剖学用語委員の態度はできる限り尊重しながらも日本語用語を重視するようになり、2)の意図の完全な遵守は難しくなっているのである。これは4)の意図が入り込んできたために顕著になった問題である。

3)と4)は一見すると無関係のようであるが、両者は国語愛護同盟医学部会あるいは後継の国語協会医学部会に端を発している。国語愛護同盟医学部会の「医学用語を選ぶ方針」に含まれていた、用語統一に向けての方針が3)へとつながり、用語整理に関する方針は4)を意識させた。解剖学会の用語委員はこの方針を受け入れ、ラテン語の直訳に囚われない日本語用語を構築していく。漢字も難漢字を避け、簡易な字体を採用していく。また日本医学会の用語整理事業に解剖学用語の案を示し、調整を図っている。

『解剖学用語』はこのように複数の意図が絡み合いながら作られたのであるが、従来は2)が重視され、3)と4)の意図およびその背景にある国語改良運動との関係は指摘されていなかった。『解剖学用語』に関係した解剖学者の記述においても、医学とは無関係の団体であるからかは分からないが、国語愛護同盟や国語協会の名は現れない。しかしながら5から7節で見たように解剖学用語委員や用語選定の方針に国語改良運動が大きく関与していたのである。

国語愛護同盟や国語愛護協会においても医学用語の問題は活動のごく一部に過ぎない。この時期の国語運動については、国語学史や言語史において様々な分析が行われている⁵⁴⁾。明治以来、方言や使用文字、語彙などに関して国語の整理・統一・簡明化は大きな問題となっており、国語愛護同盟の各部会における用語整理事業にも影響を与えていたと考えられる⁵⁵⁾。国語協会の機関紙『国語運動』には大陸や南方の言語問題についての記事や仮名遣いや漢字の整理についての記事が多い。日本の進出にともなう日本語の拡大、多様な背景を持つあらゆる人々にとって学びやすい簡明な用語の構築が問題となっていたことや国語協会の設立時から関係の深い臨時国語調査会が仮名遣いや字体の簡易化を含む常用漢字についての問題に取り組んでいたことが、その背景にあるのは明らかである。

当時の解剖学用語や医学用語について考える際には、当時の国語や日本語をめぐる以上のような事情も考慮する必要がある。実際、国語協会医学

部会の発表においては外地での用語使用や教育についての問題も取り上げられている。これらの問題が実際に選定された医学用語あるいは解剖学用語に直接の影響を与えているようには見えないが、一方で仮名遣いや漢字に関しては医学用語や解剖学用語への影響が見られる。『医学用語集第一次選定』においては臨時国語調査会の仮名遣いに従うことが明記されている。また同調査会の標準漢字表も意識しているようである。解剖学用語の漢字簡略化においても、「寛骨」の例のように元々「こしぼね」の意を持っていた漢字の一部分を取り出すことで常用字に合わせることも行われており、影響は明らかである。

戦後も解剖学用語は解剖学会主導で改訂を重ねるが、国語運動が医学系の学会と連携をして用語の改良にあたることはなく、かつてのように理解しやすさや使いやすさを解剖学用語に表立って要請する動きもなかった。JNAの次の国際解剖学協定である昭和31年(1956年)のNAの採用により再びラテン語用語は大きく変化しBNAに近いものになる。日本語用語はこれに対応し必要な箇所は変更されるが、既にある用語やかつて使われていた用語を基にした変更であった⁵⁶⁾。使用漢字については簡略化がさらにすすむ。これは戦後すぐに出された当用漢字表への対応の結果である。『解剖学用語』選定に関わった委員が戦後後も用語委員を務めており、かつて標準漢字表に従おうとしたのと同じように、国から発表された漢字使用の基準に従っている。

現在使われている解剖学用語は、昭和10年代に整備された用語を直接の起源としているのである。

謝 辞

本研究は文部科学省科学研究費(21590580)の助成を受けたものである。

本稿執筆にあたり最も重要な資料である『解剖学用語』の初版については鹿児島大学歯学部島田和幸先生に閲覧させていただいた。一般配布されず、現在では入手困難である貴重な文献を閲覧させていただいたことに感謝する。

註

- 1) 本稿では解剖学書で用いられる肉眼観察可能なレベルの構造に対する用語を「解剖用語」、学会が主体になって統一をはかった「解剖用語」を特に「解剖学用語」として用いている。
- 2) 木村(1991)
- 3) 小川(1983)
- 4) 江戸時代のオランダ語からの解剖用語の翻訳については、杉本つとむ(1983)を参照した。『解体新書』と『重訂解体新書』の用語については酒井(1991)と沈(2007)も参照。
- 5) 明治期の解剖学用語集については島田(2008)を参照。
- 6) 澤井(2008)は蝶形骨に関して起こった名称の混乱を扱っている。
- 7) 以下、解剖学会の総会記録に関しては、特に指示がない場合は日本解剖学会百周年記念事業実行委員会(1995)所収の学会記録を利用した。
- 8) 黙々生(1911)
- 9) 森田(1906-1908)
- 10) Sakai(2007)
- 11) His(1895)。国際解剖学用語の変遷についてはHahn(1981)を参照。
- 12) 鈴木文(1905)
- 13) 現在の国際解剖学用語の協定であるFederative Committee on Anatomical Terminology(1998)、およびそれに対応した日本解剖学会(2007)においても字下げを用いた構造化が保持されている。
- 14) 鈴木文(1910)
- 15) 鈴木文(1932)の出版時に鈴木文太郎は既に亡くなっていたが、奥付の著作者は鈴木文太郎となっている。
- 16) 日本眼科学会(1997)
- 17) 日本解剖学会(1944)
- 18) 「JNA」は「INA」と書かれることもあるが、本稿では「JNA」に統一する。
- 19) Stieve(1936)
- 20) Suzuki S. et al.(1936), Nomenklaturkommission der Japanischen Anatomischen Gessellschaft(1937)
- 21) 尾持(1937)、鬼頭(1940)、坂本(1939)、鈴木重(1936)、鈴木尚(1937)、高木(1938)、谷口(1936)、津崎(1936)。石澤(1931)はBNAの見直しが始まったことを伝えている。註22も参照。
- 22) 用語数の比較には高木耕三、尾持昌次(1943)を用いた。『改訂解剖学名集第17版』と『解剖学用語』はともに用語が羅列されるのみで、各用語が表している構造についての説明はない。そのため異なる用語が同じ構造を指し示す場合や同じ語が異なる構造を指し示している可能性もある。高木耕三、尾持昌次(1938)や高木耕三、尾持昌次(1943)あるいは註21にあげた文献は旧用語と新用語のうちの同一構造を表す用語を対応づけることによって、用語の変化を明示化し、旧用語から新用語への橋渡しをしているのである。
- 23) 日本解剖学会百周年記念事業実行委員会(1995)。p.50
- 24) 日本解剖学会百周年記念事業実行委員会(1995)。p.52
- 25) 国語愛護同盟については、機関紙『国語の愛護』を参照した。
- 26) 国語の愛護。3(1934)。pp.4-5
- 27) 国語の愛護。3(1935)
- 28) 国語協会については、機関紙『国語運動』および安田(1997)を参照した。
- 29) 国語運動。1(1937)。p.168
- 30) 国語の愛護。6(1935)
- 31) 日本医学会の用語事業の開始については、国語運動。2(1938)において下瀬謙太郎が報告している。第25回日本医学会総会記録委員会(1991)では日本医学会側の記録から用語事業について読み取ろうとし、「国語部会医学部会」からの進言があったが進言の経緯・内容については不明としている。「国語部会」は国語協会のことであり、5節で見たように国語愛護同盟と国語協会側の資料を用いることで働きかけの経緯・内容が読み取ることができた。
- 32) 国語運動。1(1937)。p.171
- 33) 第十一回日本醫學會醫學用語整理委員會(1943)
- 34) 第十一回日本醫學會醫學用語整理委員會(1943)。p.1
- 35) 日本解剖学会(1944)では『醫學用語集第一次選定』に入っていない用語には「*」がつけられ、第一選定に選ばれた語が『解剖学用語』からも分かるようになっている。後の版において、このような印がつけられることはない。
- 36) 廣瀬(1938)
- 37) 廣瀬(1941)
- 38) エスペランティストとしての西については、東京大学医学部解剖学教室(1984)が詳しい。
- 39) 二村(1934)
- 40) 西(1936)
- 41) 日本解剖学会百周年記念事業実行委員会(1995)。p.52
- 42) 藤田(1949)。p.235
- 43) 藤田(1949)。p.305
- 44) 藤田(1949)
- 45) 高木耕三(1943)
- 46) 比較に当たっては、日本解剖学会(1947)および日本解剖学会(1954)の「解剖学用語註解」を主に参照した。
- 47) 小川鼎三(1983)。pp.56-57
- 48) 小川鼎三(1983)。p.56

- 49) 澤井 (2008)
- 50) 小川鼎三 (1983). p.54
- 51) 国語の愛護. 3 (1934). p.13
- 52) 国語の愛護. 3 (1934). p.14
- 53) 藤田 (1949) によれば, 「M. angularis」(眼角筋) や「M. infraorbitalis」(眼窩下筋) は日本解剖学会が提案し, ドイツの Spaltenholz の図譜に取り入れられている.
- 54) 安田 (1997), イ (1996), 小森 (2000) を参照した. 他にも同様の研究は多数ある.
- 55) 医学部以外の学会においても用語の整理が行われていた (福田 (1962)). 日本眼科学会 (1997) によれば, 医学以外の分野で用語統一が既に行われていたことを意識して, 眼科学会は用語制定に乗り出した.
- 56) 小川 (1955), 木村 (1991), 木村 (2008)
- ## 文 献
- イ・ヨンスク. 「国語」という思想. 東京: 岩波書店; 1996
- 石澤政男. 新しい解剖学名に就いて. 九大医報 1931; 5 (4): 210-213
- 小川鼎三. 国際解剖学用語改訂の現段階. 日本医師会雑誌 1955; 33 (4): 237-241
- 小川鼎三. 医学用語の起り. 東京: 東京書籍株式会社; 1983
- 尾持昌次・高木定夫. 臨床上必要ナル新シキ解剖学名ニ就キテ. 大阪医学会 1937; 36: 179-191
- 鬼頭杉春. 改訂萬国解剖学用語 J.N.A. ニ就テ. 北越医学会雑誌 1940; 55 (9); 718-737
- 木村邦彦. 解剖学用語の変遷. 解剖学雑誌 1991; 66: 546-553
- 木村邦彦. 解剖学用語委員会の歩み. 解剖学雑誌 2008; 83 (4): 133-137
- 国語愛護同盟. 国語の愛護. 東京: 国語愛護同盟; 1935-1937
- 国語協会. 国語運動. 東京: 国語協会; 1937-1944
- 小森陽一. 日本語の近代. 東京: 岩波書店; 2000
- 坂本彌太郎. 新解剖学名 I.N.A. の紹介. 産科と婦人科 1939; 6 (2): 74-79
- 酒井シヅ. 『解体新書』と『重訂解体新書』. 洋学史研究会編. 大槻玄沢の研究. 京都: 思文閣出版; 1991: p.97-158
- 澤井直. 我が国の解剖学の用語「蝶形骨」を例に. 解剖学雑誌 2008; 83 (4): 123-126
- Sakai T. Historical evolution of anatomical terminology from ancient to modern. *Anatomical Science International* 2007; 82 (2): 65-81
- 島田和幸. 「解剖用語」が生まれるまで. 解剖学雑誌 2008; 83 (4): 127-132
- 鈴木重武. 改訂の解剖学 (ラテン語) 名彙について. 千葉医学会雑誌 1936; 14 (8): 207-219
- Suzuki S, Kasumata T, Ura R, Fujita Niizima T, Suzuki M. Über die Nomina Anatomica Nova. *Okajimas Folia Anatomica Japonica* 1936; 14: 507-536
- 鈴木文太郎. 解剖学名彙. 東京: 丸善株式会社; 1905
- 鈴木文太郎. 解剖学名彙 第3版. 東京: 丸善株式会社; 1910
- 鈴木文太郎. 解剖学名彙 第17版. 東京: 丸善株式会社; 1932
- 鈴木尚. 新解剖術語 (I.N.A.) について. 学鑑 1937; 41 (11): 22-23
- Stieve H. *Nomina Anatomica*. Jena: Verlag von Gutav Fischer; 1936
- 杉本つとむ. 日本翻訳語史の研究. 東京: 八坂書房; 1983
- 第十一回日本医学会医学用語整理委員会. 医学用語集 第一次選定. 東京: 南山堂; 1943
- 第25回日本医学会総会記録委員会. 日本医学会総会百年のあゆみ. 東京: 第25回日本医学会総会; 1999
- 高木耕三, 尾持昌次. 辭書式新旧対照解剖学名集覧. 東京: 南山堂; 1938
- 高木耕三, 尾持昌次. 新旧対照解剖学名集覧 第八版. 東京: 南山堂; 1943
- 谷口善之. 新協定の *Nomina Anatomica* に就いて. 大阪高等医学専門医校雑誌 1936; 4: 1-55
- 沈国威. 蘭学の訳語と新漢語の創出. 内田慶市・沈国威編, 19世紀中国語の諸相一周縁資料 (欧米・日本・琉球・朝鮮) からのアプローチ. 東京: 雄松堂出版; 2007: p.217-261
- 津崎孝道. 改正せられた解剖学用語. 満鮮之医界 1936; 184: 44-48
- 東京大学医学部解剖学教室. 西成甫先生追悼会の記. 東京: 金原出版株式会社; 1984
- 西成甫. 小解剖学 第11版. 東京: 金原商店; 1936
- Nomenklaturkommission der Japanischen Anatomischen Gesellschaft. Verbesserungsvorschläge an den *Nomina Anatomica*. *Okajimas Folia Anatomica Japonica* 1937; 15: 451-520
- 日本解剖学会. 解剖学用語. n.p.; 1944
- 日本解剖学会. 解剖学用語. 東京: 丸善株式会社; 1947
- 日本解剖学会. 解剖学用語 第3版. 東京: 丸善株式会社; 1954
- 日本解剖学会. 解剖学用語 改訂第13版. 東京: 医学書院; 2007
- 日本解剖学会百周年記念事業実行委員会. 日本解剖学会百年のあゆみ. 東京: 日本解剖学会; 1995
- 日本眼科学会. 日本眼科の歴史. 大正・昭和 (前) 編. 東京: 日本眼科学会; 1997. p.167-170
- Hahn von Dorsche H. Die Nomenklaturen der Anatomen. Ein historischer Überblick. *Anatomischer Anzeiger* 1981; 150 (1-2): 11-43

- His W. Die anatomische Nomenclatur. Leipzig: Veit; 1895
- 廣瀬渉. 解剖学用語の調べ. 解剖学雑誌 1938 ; 11 : 276-279, 376-381, 494-499, 574-582
- 廣瀬渉編. 医学用文字の調査 (医学用語整理委員会報告 第五). [東京]: 第十一回日本医学会; 1941
- Federative Committee on Anatomical Terminology. Terminologia anatomica. Stuttgart: Thieme, 1998.
- 藤田恒太郎. 新解剖学用語 なぜこう變ったか? 日本医師会雑誌 1949 ; 23 : 148-151, 234-236, 305-308, 381-384, 462-465, 539-542, 609-615
- 福田恆存. 国語問題論争史. 東京: 新潮社; 1962. p. 200-201
- 二村領次郎. 解剖術語集覧. 東京: 金原商店; 1934
- 黙々生. 第十九回日本解剖学会演説大要. 東京医事新報 1911 ; 1714 : 27-29
- 森 優. 新しい解剖学名に就いて. 九大医報 1939 ; 13 (3) : 230-232
- 森田齊次. 解剖学講義. 東京: 明文館; 1906-1908
- 安田敏朗. 帝国日本の言語編制. 神奈川: 世織書房; 1997

The Alteration of Japanese Anatomical Terminology in the Early Showa Period and the Japanese Language Reform Campaign

Tadashi SAWAI, Tatsuo SAKAI

Juntendo University School of Medicine, Department of Anatomy and Life Structure

In the second decade of the Showa period, great changes were made in the Japanese anatomical terms. It has been proposed that the presentation of JNA (*Jenaer nomina anatomica*) was one of the factors leading to the change. The Japanese language reform campaign, however, played an important role. The party *kokugoaigo doumei* (国語愛護同盟) and its successor *kokugo kyokai* (国語協会) required concise and unified technical terms. The anatomical nomenclature committee of the Japanese Association of Anatomists worked to satisfy this requirement. The committee consulted with nomenclature committees of other medical associations and took account of their opinions. The anatomical nomenclature committee abandoned the literal translation from Latin to Japanese and shaped a succinct Japanese terminology. Modern Japanese anatomical terms are based on this terminology.

Key words: Japanese anatomical terminology, *kokugoaigo doumei* (国語愛護同盟), *kokugo kyokai* (国語協会)